

## 砂川秀樹『カミングアウト』

(2018 朝日新書)

加藤 秀一  
(明治学院大学社会学部)

カミングアウトとは、本書によれば、「自分がLGBT（レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダー）などの性的マイノリティであることを誰かに話す」ことである。たったそれだけのことに、新書とはいえ一冊の本を費やして論じるべきことなどあるのだろうか。あるのだ。それどころか多くの場合、カミングアウトという行為には、一冊の本でも語りきれないほどの複雑で微妙な問題群がつきまとう。なぜなら本書が言うように、カミングアウトとは「伝える側と伝えられた側との関係が作り直される行為」だからであり、それまで培われてきた人間関係を根こそぎ揺るがし、時には破壊してしまいかねないチャレンジだからである。

カミングアウトしようとする人の多くは、はたして相手が真実を告げるべき人としてふさわしい人物なのか、いやその前にそもそも真実を知ってほしい相手なのか、もしも自分の告白を受け止めきれない人にカミングアウトしてしまったら、相手も自分もただ傷つくだけなのではないか、といったとめどない思いに迷い、逡巡する。自分が性的マイノリティであることを他人に話すという、たったそれだけのことが、なぜそれほどまでに困難なのか。それはただ単に個人の優柔不断さなどに帰せられるべき問題ではない。さまざまな経験の細かな襞に目を凝らし、思いを致し、しか

もそれらをこの社会という共通の背景の上に位置づけることができはじめて、カミングアウトという、一見すると単純にみえる行為をとりまく渦の深みと広がりを理解することができるだろう。

ながらくゲイやレズビアンの人々の声に耳を傾けてきた著者による本書は、優しい語り口ながら力強く、そうした方向へ読者の背中を押してくれる、魅力的な誘いの書である。

\*

本書は全部で5つの章からなる。各章の冒頭には実際にカミングアウトをした人々の経験談（カミングアウト・ストーリー）が置かれ、そこに散りばめられた要素を手がかりに、その後の論述が展開される。なお、最近ではカミングアウトという言葉の意味が拡大しており、LGBTは言うまでもなく、どんなことであれ自分の秘密を他人に告白すること全般をカミングアウトと呼ぶことさえ増えているが、本書はこの概念の本来の対象であるゲイとレズビアンに的を絞っている。

第1章「出会う～性を考えるための基礎知識」では、性的（セクシュアル）マイノリティだけでなく、セクシュアリティ全般に関する基本的なことがらわかりやすく解説される。とりあげられているのは、性には4つの領域（性自認、性別表現、身体の性別、性的指向）があることや、L/G/B/Tそれぞれの違いといった正しく基本的

な事柄ばかりなのだが、解説の中身には著者ならでの視点が随所に見られ、ジェンダー／セクシュアリティ論についてあまり知識のない人はもちろん、すでにある程度学んでいる人にとっても、新たに目を見開かされる指摘がいくつもあるだろう。たとえば著者は、同性愛／異性愛を表す「性的指向」に代えて「指向性別」という言葉を提唱する。その理由は何か。性的マイノリティについてある程度の知識をもつ人は、トランスジェンダーかシスジェンダーかという性自認は性別（ジェンダー）の問題、異性愛か同性愛かという性的指向は性欲や恋愛感情（セクシュアリティ）の問題という図式で理解していることが多い。それは確かに事態のある側面をとらえた図式であり、必ずしも間違いであるとは言えないが、やはりおかしいところがある。なぜなら性的指向もまた「自分の性別と相手との性別との組み合わせを表現する語」であり、したがって性別（ジェンダー）の軸を含んでいるからだ。このことは、私たちが知る限りのあらゆる社会において、好むと好まざるとにかかわらず、性別による枠づけと無縁でいられる人は誰もいないという事実と結びついている。性的指向を〈ジェンダーではなくセクシュアリティの問題〉としてしまうことは、そうした現実を見失わせてしまう危険があるだろう。こうした問題を鋭く意識する著者は、「指向する性別」という意味を明確にするために、「性的指向」ではなく「指向性別」という語を用いるのである。

第2章「共有する～カミングアウトする『理由』」では、まず異性愛者と同性愛者が置かれた立場の非対称性が明らかにされる。同性愛者のカミングアウトに対して、しばしば「異性愛者はわざわざカミングアウトなどしないのに、どうして同性愛者はそんなことをするのか」という疑問が寄せられるが、そのような認識は重大なことを見落としている。実際には、異性愛者もまた自分が異性愛者であるということを事あるごとに言っているの

だ——たとえば、自分の恋人のことや結婚生活について語るときに。ただしそのことに自分では気づいてすらおらず、「自分は異性愛者である」という言い回しも使わないというだけのことなのである。

指向性別をめぐるこうした非対称な構造をふまえた上で、カミングアウトのさまざまな「理由」が詳解され、その背景が解説される。長年のパートナーが病気になったり死亡したりした際に残された側の立場が顧みられないという現状については他の類書でもしばしば大きな問題として取り上げられているが、本書では恋人やパートナーがいない場合でもカミングアウトの可否が重大な問題になるケースも紹介されており、カミングアウトの背景の広がりには気づかされる。

第3章「向き合う～打ち明けられた側の戸惑い」では、とりわけ家族に対するカミングアウトにおいて生じる独特の困難と、アウトイング（本人の許可なく、誰かの指向性別を他人にばらすこと）の暴力性という2つの問題がとりあげられる。ここでは紙幅の都合上、前者についてのみ触れておこう。親へのカミングアウトは「親不孝」だと言う人がゲイやレズビアンの中にもいるという。子どものいる異性カップルという家族像を当然のものとして内面化してきた世代の親たちにとって、自分の子どもが同性愛者であるという事実がどれほど衝撃的であるかに思いを致すなら、そうしたスタンスも十分に理解できるだろう。同性愛を否定的にしか語らないこの社会のなかでは、そもそもレズビアンやゲイ自身でさえ、自分のセクシュアリティを必ずしも肯定的に受けとめられるとは限らないのだから、より否定的なイメージが強い時代を生きてきた親たちがそれを理解するには、さらに多くの時間が必要であるのは致し方ないことだ。そのことを認めながら、しかもカミングアウトが良い結果をもたらさなかったケースも多々あることを承知のうえで、しかし困難を乗り

越えた先に親子間の「より深い関係」が見出されることもあることを、砂川氏はいくつかのケースに即して示している。

第4章「ともに変わる～関係の再構築へ」の大部分を占めるのは、二つの長い「カミングアウトストーリー」だ。その一つは子どもがレズビアンである母親によるもので、最初は予想外の告白にたじろいでしまったため、いったんは娘との関係が悪化したものの、その後は積極的に娘の「メッセンジャー」となり、他の家族成員に娘への理解をうながす役目を引き受けた体験がくわしく語られている。もう一つは著者である砂川氏自身のストーリーで、やはりいったんは難しくなった親との関係を修復し、カミングアウト以前よりもより親しい関係性をつくりあげるに至ったことが書かれている。これらの実例に即して、カミングアウトが一過性の出来事ではなく、人々のライフ・ヒストリーの中に織り込まれるものであることが示される。それは、本書の「はじめに」に記された、カミングアウトは「伝える側と伝えられた側との関係が作り直される行為」であり、より正確に言えば「作り直される行為の始まり」であるという言葉に呼応する実例である。

最後の第5章「あなたから世界へ～誰もが生きやすい社会」では、同性婚のような法制度や学校で性的マイノリティについて教育することの重要性が論じられる。カミングアウトという個人の決断も、そうしたパブリックな背景と切り離すことはできない。セクシュアリティはプライバシーの問題だといって単純に片づけていては、性的マイノリティはいつまでたっても自分が自分らしくいられるという積極的な意味でのプライバシーを手にはできないのである。

ここまで、本書の内容をかなり詳しく——ただし評者の主観的解釈も交えながら——紹介してきた。以上から明らかだと思うが、本書の基本的なスタンスは、カミングアウトという行為が現在の

日本社会においてもつ意味を明らかにするという社会学者（著者は文化人類学者である）ならではのものである。そのことは以下の箇所でも明瞭に述べられている。

この本の目的は、カミングアウトをしない人を否定するためでもなく、またカミングアウトを受けられず、受容できないという人を批判することではない。カミングアウトをする／しない、ということが、ほんとうに自由度の高い選択となるためには、より多くの人々がカミングアウトの意味を、そしてその背景を理解していくことが大事だということを強調したいのだ。（第3章より）

けれども、あくまでもそのようなスタンスを尊重して読むとしてもなお、本書は全体として、性的マイノリティ当事者に対しては勇気をもってカミングアウトすることの意義を示し、また非当事者に対しては、近しい人からのカミングアウトを受け止めるための準備を促す実践への提言の書であり、また一種のガイドブックでもあると言ってよい。きっと多くの読者が、すなわちカミングアウトしようかしまいかをめぐって日々苦しい思いで過ごしている当事者も、子どもや友人からカミングアウトを受けて戸惑い、あるいはかれらを支えきれない罪悪感を抱えた非当事者も、本書から大きな勇気と具体的な対応策とを受け取ることができるだろう。

\*

最後に、本書を歴史的に位置づけるための一助として、これまで日本で性的マイノリティのカミングアウトがどのように語られてきたかをざっと振り返っておきたい。もとより網羅的な記述ではなく、取りあげる素材の選択もほとんど偶然の結果である。

評者は1983年に大学に入り、しばらくして「ジェンダー」という言葉に出会って、徐々にそれが意

味するものを専門的に勉強するようになったのだが、フェミニズム運動／思想に軸足を置きつつも、ゲイやレズビアン、またトランスジェンダーとフェミニズムとの関係については、当初からずっと気になっていたし、現在に至るまでその点を忘れたことはない。それでも、ことカミングアウトをめぐる困難とその背景について真面目に考えるようになったのは、もう少し後のことだった。それは直接には1991年に出版された伏見憲明『プライベート・ゲイ・ライフ』（学陽書房）と翌1992年に出た掛札悠子『「レズビアン」である、ということ』（河出書房新社）のインパクトのおかげだった。これら二冊の歴史的名著は、カミングアウトという行為を特別なものにしてしまう異性愛主義／性別二元制の社会に対する鋭利な批判であるとともに、カミングアウトの先にある可能性を具体的に示して見せてくれたのだ。また、1994年に『「南部からこんにちわ」～米国レズビアン・ロード・ドキュメント』（原題Greetings from OUT HERE、エレン・スパイロ監督）というタイトルでフジテレビ系列で放送されたドキュメンタリー・フィルムは、同性愛者差別の強いアメリカ南部に住む同性愛者たちを南部出身のレズビアン女性が撮影したもので、カミングアウトした後も周囲との軋轢を抱えながら生き抜く登場人物たちが印象的な作品だった（これは数年間にわたって勤務校の授業で使った）。このフィルムが放映された際、その前後にナビゲートのために司会のデブ・スペクター、HIVポジティブをカミングアウトしていたパトリック・ボンマリイート、そして掛札さんという3名による中身の濃い座談が置かれていたのだが、そこではカミングアウトするかしないかは個人の選択として尊重すべきであるということが共通了解として語られていた。パトリックの「カミングアウトは完全にパーソナル・チョイスだね」という言葉がとりわけ強く印象に残っている。

他方、1991年に始まり1997年に決着するまでつづいた「府中青年の家事件」をめぐるアカー（動くゲイとレズビアン会）の法廷闘争について学ぶことで、カミングアウトという焦点に浮かび上がる個人と社会・政治との密接な関係を改めて深く考えることを強いられた。それは若き評者にとって、フェミニズムから学んだ「パーソナルなことはポリティカルなこと」というスローガンの具現化そのものであると思われたのだ。アカーの立場を全面的に展開したキース・ヴィンセント、風間孝、河口和也『ゲイ・スタディーズ』（1997年、青土社）では、ヴィンセントによる「理論編」に出てくる「カミングアウトしてはじめてゲイはゲイになる」という主張が鮮烈だった。それは「パーソナル・チョイス」というよりも、はっきりと「ポリティカル」な活動としてのカミングアウトのビジョンだったと言えるだろう。

セクシュアリティをめぐるこのような政治主義的主張は、べつだん政治活動をしたいわけではない性的マイノリティの人々からの反発にもさらされた。ここではこの論点をめぐる議論を深めることはできないが、ただ言えるのは、ヴィンセント他もすべてのゲイとレズビアンが個々の事情を無視してカミングアウトすべきだと主張したわけではなく、またパトリックから砂川氏に至る「パーソナル・チョイス」を強調するリベラルな立場の人々も、望ましい方向性としては、可能ならばカミングアウトすることを推奨しているとも言えるのだから、両者をことさらに両極化してとらえる必要は——少なくとも、もはや——ないように思われる。ヴィンセントの「同性愛者も異性愛者もその性的アイデンティティはともに社会的で政治的な相互作用を通じて形成される」という主張と、カミングアウトとは「伝える側と伝えられた側との関係が作り直される行為」であるという砂川氏の認識とは、見かけほどそれほど遠く離れているわけではないのではないか。今日において性的指

向は生得的な傾向であると(当事者たちによって)語られることが多く、そしてそのような実感そのものはあくまでも尊重されるべきではあるが、しかし「同性愛者」や「異性愛者」、さらには最近の「Xジェンダー」といった言葉が社会のなかで初めて意味をもつアイデンティティの分類カテゴリーであることも忘れるべきではない。社会と性的アイデンティティとの関係というこの問題は、「生得的か環境によるものか」あるいは「本質か構築か」といった粗雑な二分法で片づけられるべきものではなく、これからも繰り返しさまざまなやり方で問い直されるべきものである。こうした理論的問いもまた、「カミングアウト」というシンプルな行為を通じて見えてくる広大な領域である。易しく、かつ優しい言葉づかいで書かれた本書『カミングアウト』は、このように広範な課題とその向こう側への展望を読者に示してくれる書物である。